

「高校の英語の授業は英語で行う」そんなことできる？

－ 授業改善の一考察 －

市川 靖子（千葉県立君津商業高等学校）
篠崎 保夫（千葉県立君津商業高等学校）

はじめに

「英語の授業は英語で行う」「4技能をバランス良く統合する」「積極的にコミュニケーションを図る姿勢を育成する」「言語や文化に対する興味関心を高め、理解を深める」など英語の授業に求められていることは数多くある。実際の教育現場で生徒たちを目の前に行くと、それらを達成するための道のりは途方もなく長く、とうてい達成できないのではないかと思うことさえある。

本稿では、英語学習に抵抗感を抱いている生徒が多くいる公立高校で、生徒の気持ちを英語学習に向けられるか、英語で授業を行うのは可能かを問い続けた1年間の授業から見出した授業改善の一提案である。

魅力のある英語の授業とは

どんなに素晴らしい授業でも、そこに生徒の関心や参加がなければ、それは目指すべき授業とは言えない。私たちは、2014(平成26)年3月、4月より受け持つこととなった3年生の英語Ⅱについて話し合いを持った。そこでのメインテーマは、英語にほとんど関心のない生徒たちが、授業に気持ちを向けるために必要なことは何かである。また、本校のような学校で授業は英語で行えるのかである。議論の結果、以下の6点を重視しながら授業を作り上げていくことにした。

1. 生徒が授業に求めていることを調査し、それを取り入れる。
2. 生徒の特徴を把握し、授業に生かす。
3. 生徒参加型 (student-centered learning)の授業とする。
4. この1年間の目標を定める。
5. 4技能を使うバランス良く使う活動を取り入れる。
6. 授業はほぼ英語で行うことを目標とする。

生徒が英語の授業にどのようなことを期待しているのか。生徒の期待に応えた授業が行えれば生徒の英語学習への動機付けとなる。そこで、私たちは、4月に今までどのような授業を受けてきたのか、どのような授業を期待するか、どのような技能を伸ばしたいかをアンケート調査した。その調査結果で、私たちは以下のことに注目した。多くの生徒が話す力を伸ばしたいと考えている。これまで受けてきた授業は、個人で英語を読んだり、書いたりする授業が多く、ペアやグループでの言語活動はほとんど経験していない。

アンケート調査に加えて、本校の生徒たちの特徴を考えてみた。長所と短所をそれぞれ、4点挙げてみる。長所は、フレンドリー、コミュニケーションをとることが好き、体を動かすことが好き、英語を話せる人に憧れを持っている。短所は、勉強が嫌い、集中力に欠

ける、英語を将来必要としていない、基礎的な英語さえ身に付いていない。

本校の生徒が望むこと（話す力の伸長）と生徒の特徴を考慮すると、生徒参加型の授業が授業改善の鍵となるのではないかという方向性が見えてきた。ここで言う生徒参加型の授業とは、教師による説明を極力減らし、授業を様々な生徒による言語活動で構成するということである。この授業の利点は多くある。生徒は、次から次へとやるべきことが指示されるので、眠くならないし、飽きない。また、生徒自身が授業に関わるので興味が持てる。そして、活動のゴールが達成できたときには、自信が持てる。教師が4技能を常に念頭に置いて、言語活動を作れば、毎時間バランス良くとはいかなくとも、各レッスンで見れば、4技能を使用する活動を入れることはそれほど無理がないだろう。さらに、言語活動中心の授業にすると、英語で授業が行えるのである。活動中での教師が使用する指示は短く、簡単な英語なので、何度も同じ表現を繰り返すことで、学力が低い生徒でも自然と覚えてしまうからである。当然、教師が英語で授業をすることは、生徒にとって聞く、そして、話す活動となる。これだけで、4技能のうち2技能を使用することになる。

私たちは、この1年間の目標を、言語活動を豊富に盛り込んだ生徒参加型の授業を展開することで、「英語の授業を楽しみながら、英語学習に対する動機付けや自信を高める。」とした。

授業の試行錯誤

生徒参加型の授業を成功させるために、以下の4点の工夫を試みた。

1. 授業を3～4つのセクションに分ける。
2. ペアやグループワークなどの共同作業を多く取り入れる。
3. 言語活動の目標を達成するために、小さなステップを多く作る。
4. 教科書以外の教材を積極的に取り入れる。

本校の生徒には、集中力が十分でない生徒が多く見られるので、授業を3～4つのセクションに分け、異なった教材を使った活動を行った。これにより、1つのセクションに費やされる時間は5分～20分となり、集中しやすくなる。また、1つのセクションが終わると、全く異なるものを学習するので気分転換にもなる。

言語活動には、共同作業を多く取り入れた。インタビュー活動などでは、教室を動き回るので、授業が活発になる。英語は好きではないが、コミュニケーションをとることが好きな生徒が多いので、クラスメートと取り組むこと自体を楽しむことができる。

英語嫌いを作らないためには、「できない」を払拭する必要がある。そこで、どの活動も小さなステップを1つずつこなしていけば達成できるような工夫をした。当然、その小さなステップは、授業を聞いていれば誰にでもできるような簡単なステップとした。

最近の教科書には、興味深いトピックが多く掲載され、工夫がみられる。しかし、残念ながら、本校のような生徒が読んでみたい！知りたい！という対象ではない。そこで、教科書を終えることよりも、教科書以外の教材を積極的に使用して、生徒の興味関心を揺さぶることを優先した。日常生活で使える表現を学びたいと言う希望から、買い物で使える

表現を学ぶセクションを設けたり、教師の私生活を知るような教材を作成したりした。

以下に、50分の授業どのように分割し、どのような教材を使ったのか、一例を記す。

Icebreaker activity	5 min.	<ul style="list-style-type: none"> • a basic question • 1 minute talk • a short story 3つの活動のうち1つを行う
Daily Conversation	5-10min.	買い物で使う表現
Textbook	20-25min.	教科書
Extra	15-20min	先生たちの夏休み（オリジナル教材）

1つのセクションに費やすことのできる時間は、1時間のうち5～20分なので、1つの言語活動に、各時間少しずつ取り組み、教授業時間かけてその活動を達成することとなる。

スモールステップの役割

ここでは、Icebreaker activityの「1 minute talk」を例にとって、どのようにスモールステップを作ったかを記す。「1 minute talk」とは、あることについて1分間英語で話すというシンプルな活動である。活動自体はシンプルだが、英語力の低い生徒たちには難しい活動である。そこで、様々なスモールステップを作り、多くの生徒が取り組めるようにした。

スモールステップを作る際に重要なのは、生徒たちがその活動に取り組む際に、どんな困難に直面するかを考えることである。その困難を乗り越えられるように、小さなステップを組み合わせていく。「1 minute talk」で本校の生徒たちが直面するだろう困難の中で主なものは次の3つである。①何を話したらいいか思い浮かばない ②語彙力がない ③文法力がない これらの困難を乗り越えられるように以下のようにサポートした。本例でのトピックは「About myself」である。

Step 1 : Mind map 作成

突然、自分のことについて話してみようと言われても、ほとんどが沈黙に陥るだけである。そこで、何を話すかを箇条書きで書き出す Mind map を作成する。ただ、Mind map を書いてみようと言っても、本校の生徒は、何を書けばよいか分からず、筆が進まない生徒が多い。そこで、次のような質問で、Mind map に書くべきことを生徒に問いかけ、その答えを書くように導く。教師：What's your favorite animal? 生徒：cat. 生徒は、Mind map に cat と書く。もちろん、答えは生徒それぞれ異なる。質問を15ぐらいすれば、立派な Mind map ができあがる。15個の答えを書いた後、生徒にそれ以外の自分のことを2つ書くように指示する。

Step 2: 1回目のチャレンジ

教師が、自分で作成した Mind map を見せながら、デモンストレーションをする。その

後、生徒が、1回目のチャレンジをする。このチャレンジでは、教師のデモンストレーション以外のサポートはない。ペアで行い、聞き役の生徒は、パートナーが何語話せたかを数える。発話した語数を定期的にカウントすることで、新たな活動への動機づけとなることを期待している。

Step 3: 定型表現を学ぶ

Step 2 では、次のような問題が発生する。話すべきことは分かっても、どのように文を作ったらいいか分からない。英単語が思いつかない。そこで、教師が、自分のことを話すのによく使いそうな表現や単語を提示し、生徒は口頭練習をする。例えば、I'm ~ years old. My favorite ~ is ~. I live in ~. である。その後、1回目のチャレンジで思いつかなかった英単語を辞書で調べる時間を与え、教師がサポートする。

Step 4: 2回目のチャレンジ

教師から提示された表現や自分で調べた単語を使い、2回目のチャレンジをする。1回目同様、ペアで行う。

以上のように、たった1分で行える活動を、4つの小さなステップづくり、1回5分～10分を4時間～5時間の授業時間をかけて行った。これにより、本来だったらほとんどの生徒がギブアップするような活動も、完成度の差こそはあれほぼ全員が取り組めるようになった。

教科書からどのような言語活動をつくるか

多少の改善しながらではあるが、ほぼ毎レッスン以下のような言語活動を用い、教科書を進めている。毎回、同じ言語活動を使う利点の一つに、生徒にとって取り組みやすいということがある。また、英語での同じ指示を毎回使うことになるので、1学期後半になると、英語のみでスムーズに指示が通るようになる。

言語活動 使用するスキル	活動内容と活動形式（個人 / ペア/グループ/クラス）
Listening (L), Reading (R) Speaking (S), Writing (W)	
1. Warm up 1 S	1. 題材のブレインストーミング（ペア） 2. 教科書に掲載されている写真の描写（ペア）
2. Warm up 2 L, W	教科書本文を簡単に書き直したものを聞いて、質問に答える （個人、ペア）
3. Interview S, L, W	1. インタビュー活動（クラス） 2. インタビューしたことについての発表（クラス） 3. インタビューしたことについて書く。（個人）

4-1 First Reading R	1. 辞書などの助けを借りず、自力で読む。その後ペアで情報交換 2. リーディングガイド（教師作成）の助けを借りて、再度読み、ペアで情報交換
4-2 Second Reading R, S	1. 辞書で単語を調べる。（個人） 2. 単語を暗記（ペア）その後、小テスト（個人） 3. 本文をワークシートに書き写す。（個人） 4. チャンクごとに訳す。（グループ） 5. サイトトレンスレーション（ペア） 英語→日本語 日本語→英語
4-3 Third Reading S, L	音読練習（クラス / 個人 / ペア） リピート、シャドーウィング、オーバーラッピングなど
4-4 Final Reading S, L, W, R	1. リテリング（ペア / クラス） 1 回目のチャレンジ：助けなしで挑戦 2 回目のチャレンジ：単語、構文を習った後に挑戦 3 回目のチャレンジ：どのように提示された構文を使えばよいかを習った後に挑戦 2. サマライゼーション 空所を埋めることで要旨を完成（ペア） 3. Q and A（ペア） 文で答えなければならないような、少し複雑な質問に英語で答える。 また、自由に質問文を作る。 4. ディクテーション（個人） そのレッスンで学習する文法事項が含まれている文を書き取り、自分で文を作る。
5 Final Activity (S, W, L, R)	手紙を書く、短いスピーチをする、プレゼンテーションをするなど、そのレッスンに関連した自由度の高い活動を行う。

おわりに:生徒からの評価

3年生の授業がほぼ終了となる2014(平成26)年12月に、改めて英語の授業に対するアンケート調査を実施した。嬉しいことに生徒からは高評価を受けた授業となった。本授業を実施する前の調査では、約25%の生徒が英語に対する抵抗感を持ち、英語の授業には何も期待していないと答えていた。12月の調査では、そのような生徒が15%にまで減った。逆に、事前調査では、英語学習や授業に対して積極的な姿勢を示していた生徒は、30%だったのが、事後調査では65%まで増加した。

特に生徒たちが関心寄せた授業は、オリジナル教材の「先生たちの夏休み」だった。ちょっとしたイタズラ心で、篠崎はニューヨークで写真の個展を開き、市川は北極にホッキョクグマを見に行くという対話文を作成し披露した。生徒たちはこれに予想以上の興味関

心を持ち、授業後に、本当にニューヨークに行くのか？やホッキョクグマなど見られるのか？などの質問が相次いだ。ここで終わらせてはもったいない、(期待している生徒たちに申し訳ない)と考え、本当にニューヨークや北極に行ったかのような合成写真を撮り、2学期に「私たちの夏休み」というタイトルで、写真をパワーポイントで提示しながらプレゼンテーションをした。写真があまりにも良い出来だったために、このプレゼンテーションの後でさえ、本当の話だと信じている生徒がいた。このプレゼンテーションでは終わらず、お土産を交換している場面を設定し、写真撮影をし、再度、プレゼンテーションをした。この段階ではさすがに作り話だとわかったようだが、多くの生徒が楽しんでいただように思う。

多くの生徒が楽しみを感じたこと以上に重視したいことは、この教材を使用して授業を行っている間、英語が本当の意味でのコミュニケーションツールとなったと感じている。英語を苦手とする生徒が多くいる授業で、英語をコミュニケーションツールとして活用することは非常に難しい。生徒自身が持っている語彙力や文法力が極めて不足していることと、持っている英語力を駆使して理解したいと思わせる教材や表現したいと思わせる題材を提示することが難しいからである。「先生たちの夏休み」というオリジナル教材は、こちらの予想以上に、多くの生徒の興味関心を引き、「理解したい」という気持ちをうまく引き出すことが出来た。生徒たちは、自身が持っている英語力や知識を最大限に利用して、目標を達成する体験ができたのではないかと考えている。

改めて今振り返ってみると、生徒が授業を楽しめるかどうかの要因のひとつは、教師も共に楽しめることであり、それがかなり重要なのではないかと思う。ワークシートなどの教材を作るのにもかなりの時間を要するのだから、教師側も楽しんで授業を作り上げたい。そして、作った教材で生徒が楽しんでいる様子が次への活力となる。

「どのような言語活動が、そして、どのような授業が素晴らしいのか。」これに答えるのはかなり難しい。なぜなら、ある活動がA組ではうまくいっても、C組では失敗というとはよくあるし、同じクラスでも2時間目は活発な授業が展開できるのに、6時間目は全くダメということもある。ただ、ひとつだけ明確なのは、その答えを出せるのは、試行錯誤を繰り返す教師とその生徒たちである。その答えを求めて、現場の英語教師たちは生徒たちと格闘している。